

J U M P I N T O

学生たちの国際体験記

A

第

9

集

N E W W O R L D !



JUMP INTO A NEW WORLD!

学生たちの 国際体験記

第

9

集



学生たちの
国際体験記

第

9

集

目次

千葉から世界へ

口絵	[敬愛プログラム]	04	[カンボジア・ベトナム旅行]	08
	[パスポートの要らない海外留学]	05	[日本語教師]	09
	[内モンゴルの植林]	06	[長崎大学医学部大学院]	10
	[World Fair]	07		

第9集発行に寄せて

国際学部長 中村圭三 11

Chapter 01 キャンパスから一步飛び出して

A. 敬愛プログラム

▶ 田舎の経験	14
▶ 首都圏における日中交流史の過去と現在	18
▶ ネパールにおける小学校建設の為の 支援活動	21

B. 千葉の経済特殊 24

C. ブリテッシュ・ヒルズ研修

パスポートの要らない海外留学	28
----------------	----



自分が変わる、世界が変わる

JUMP INTO A NEW WORLD!

Chapter 02 学生たちの活動

- A. 内モンゴルの植林 32
- B. ワールドフェアを通して 36
- C. 海外旅行の楽しみ
カンボジア・ベトナム旅行 39

Chapter 03 卒業生たちは今

- A. 日本語教育で国際交流
～タイと日本の架け橋を目指して～ 44
- B. 敬愛、そして長崎から世界へ！
長崎大学医学部大学院 48

付 録

- Jump into a New World! 規程 53
- 執筆者一覧 54

Chapter 01 敬愛プログラム

- 田舎の経験
- 首都圏における日中交流史の過去と現在
- ネパールにおける小学校建設の為の支援活動



ネパールにおける小学校建設の為の支援活動



敬愛プログラムのスタッフ

田舎の体験



佐倉市 井上さん宅で

首都圏における日中交流史の過去と現在

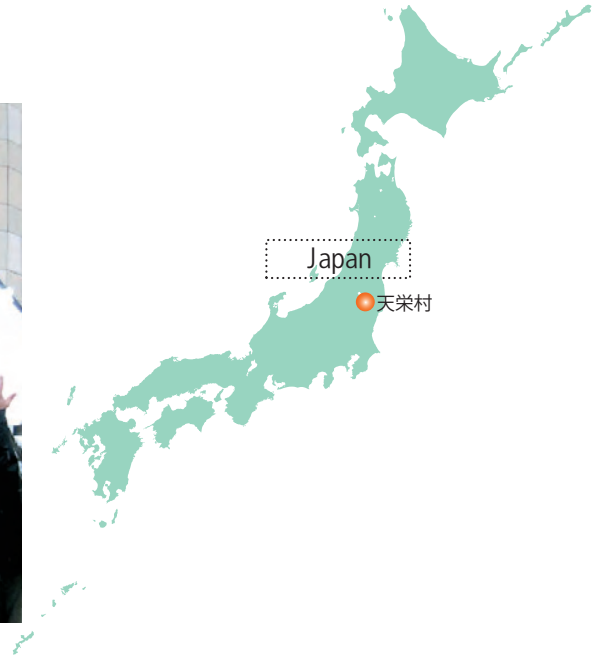


稲毛浅間神社境内 (愛新覚羅邸の隣)

ブリティッシュ・ヒルズ研修



本館マナー前で記念撮影



Dinnerのためのマナー研修

Chapter 02 内モンゴルの植林

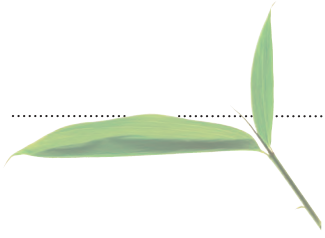
→中国沙漠植林ボランティアを通して見た恩格貝「村」の誕生
→2009年中国沙漠植林ボランティアに行つて



●恩格貝での関西学院隊と敬愛隊（前列）の遭遇



クブチ砂漠での植林活動風景



ワールドフェア

→ワールドフェアを通して



キャンパスには 14 ヶ国の学生が集っています



ファッションショー

カンボジア・ベトナム旅行

→海外旅行の楽しみ



アンコールワット



ガイドのおじさんと岩井さん



朝からチーを売りながらおしゃべりしているおばさんたち

Chapter 03

日本語教師 タイ

→日本語教育で国際交流
～タイと日本の架け橋を目指
して～

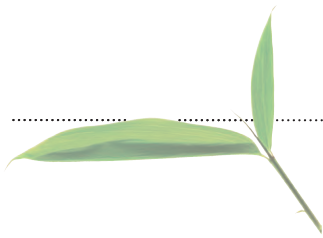
日本語教師



タイの教え子たちと



右端が前野さん



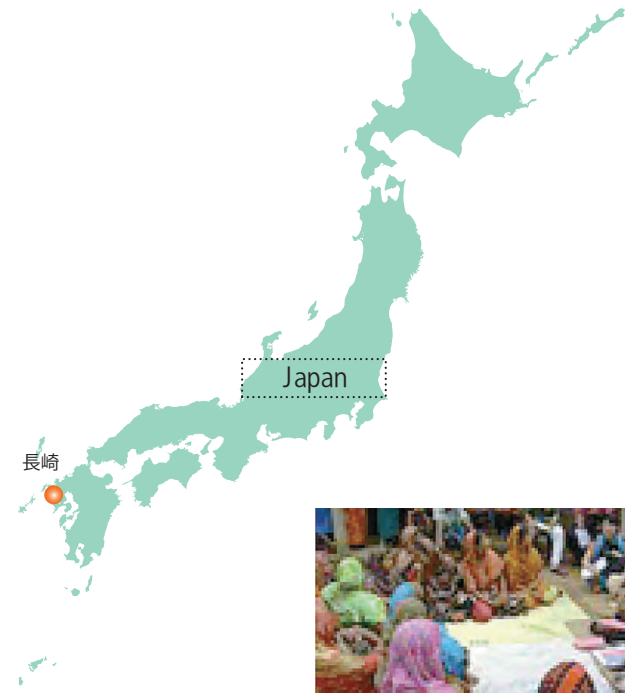
長崎大学医学部大学院

日本[長崎]

→敬愛、そして長崎から世界へ!



バングラディッシュの母子手帳



村の女性と共に



BRAC マイクロクレジットの回収風景



産科緊急時に妊婦に配られる赤色貯金箱

第9集発行に寄せて

1997年に佐倉キャンパスに開設された国際学部は、13年目の2009年に稲毛キャンパスに移転しました。第9集には、移転1年目に当たる2009年度の在学学生および卒業生の国際的な活躍が紹介されています。

敬愛プログラムは、2009年度に新しくスタートした科目で、グループによる活動が基本です。国際学部から5グループが参加、学生達は試行錯誤を重ねつつ目的達成を目指し、非常に良い体験を得ることができたと思います。

国際学部には十数カ国からの留学生が学んでいますが、これらの留学生を中心としたワールドフェアは、敬愛フェスティバルの目玉としてすっかり定着して来ました。各国の華やかな衣装を身にまとった留学生に接することができ、まるで世界旅行に招待されているかのようです。

“パスポートの要らない海外旅行”、福島県にある本格的な英語研修施設「ブリティッシュ・ヒルズ」で行われた語学研修は、その内容と施設のすばらしさが非常に好評のようです。

国際学部の歴史を感じさせる内容もあります。中国内モンゴルでの植林ボランティア活動は、約10年間にわたり続けられています。10年前に植林をした時には殺風景であった恩格貝という場所が、植林のお蔭で今では数十戸からなる村に大変身し、食堂も4、5軒できたとのことであります。

卒業生からのレポートも興味を引きます。国際学部では、長年にわたり日本語教員養成講座を開講してきました。その講座を受講した卒業生が、タイの大学で日本語教員として活躍しています。また、青年海外協力隊など海外で国際協力活動をし、さらに国際協力の専門家を目指して長崎大学医学部大学院で学んでいる国際学部1期生の生き方には我々も励まされます。

国際学部で学ぶ在学学生も、卒業生もお互いの活動を通して国際交流を深め、未来を切り開いて行かれることを願っています。

国際学部長 **中村 圭三**

Chapter 01

[第1部] キャンパスから一歩飛び出して

→敬愛プログラム

田舎の経験

首都圏における日中交流

ネパールにおける小学校建設の為の支援活動

「千葉経済特殊」

ブリティッシュ・ヒルズ研修

2009年度は敬愛大学国際学部にとって新たな出発の年でした。10年間住みなれた佐倉の地を離れ、千葉市に移転して、経済学部とのキャンパス統合を果たしました。いろいろ意気込んで始まったこの一年でしたが、新型インフルエンザの影響で、海外スクーリングなど恒例の取組みは行うことができませんでした。代わりに、国内で行われた国際学部の、如何にも国際学部らしい取組みをご紹介します。

田舎の経験

今枝優子・王セイ・金善海・魏剛、周供、張晶、李心欣、李バイ

敬愛プログラムは、学長の発案で今年度から始まった企画です。「自分で定めた目標をやり遂げる能力を高めるとともに、共同作業を通して目標を達成する経験を積ませる」ことを目的に、学生の共同研究を支援することになりました。学生は具体的なテーマを決め、達成目標や段取りを大学に提出し、承認を受けてから一定期間内に成果を上げられるように活動し、この成果を公表することが求められます。初めての試みでしたので、大学側でも試行錯誤、学生の側も様子見、ということで、参加したグループは多くはなかったのですが、その香奈で今回は「田舎の経験」「首都圏における日中交流」「ネパールにおける小学校建設の為の支援活動」の三つの取り組みを紹介します。参加した学生から提出されたレポートを編集しています。

最初のグループの活動は、中国人の学生の、日本の田舎の暮らしや農業を体験してみたい、という希望から始まりました。千葉の名産品である落花生について研究し、落花生を栽培している農家へお手伝いに行きたい、ということになりました。農家を探すのはなかなか大変でしたが、水土里ネット印旛沼の高橋修総務課長のご紹介で、佐倉市内にお住まいの井上順生さんをご紹介いただきました。

5月30日、まず水土里にうかがって高

橋さんと打ち合わせをした後、井上さんのお宅にうかがいました。丁度、落花生に小さな黄色い花が咲いていました。落花生は枝豆のように枝にぶら下がるように実るものだと思っていた学生が多く、実は、花が萎んだ後に茎が花の根元から伸びて地中に入りその先に莢ができて実になる、「実が落ちて生る」ことから名づけられたということ始めて知りました。この日は畑に出て、今度のプログラムや今後のスケジュールについて打ち合わせを行いました。

この時の井上ご一家の印象を留学生の一人がこんな風に書いています。「井上さんはとてもまじめな人で、落花生をはじめいろんな農業の知識を教えてくださいました。奥さんもやさしくておしゃべりがとても好きで、緊張している私たちとすぐ仲良しになって、農業のことだけでなく、いろんなことを聞いたり、聞かせたりしました。(王セイ)」

二回目にうかがったのは10月7日、落花生掘り作業の日でした。8時に井上さんの家に集まり、着替えをして「農業用の靴」をはき、麦わら帽子をかぶって畑に出ました。中国からの留学生たちがまず驚いたのは地下足袋でした。報告会では、初めて見た地下足袋の履き方を教えてもらったことが興奮した様子で伝えられました。

井上さんはこの日のために、畑の一部を刈り残しておいて下さいました。まず最初

に井上さんが機械で根を切り、皆はそれを土の中から掘り出して、畑で逆さにして乾燥させます。「次の日は足がパンパンに腫れました」と皆、笑いながら話してくれました。

○日本が中国と違ってしているのは中国では手で落花生を掘り出す。日本は土地が柔らかいので、車みたいな機械で掘り取った株は土を落とし、根を上にして乾燥させます。この状態で1週間ほど置き、ある程度乾燥したら積み上げます。地干し中に雨が降ったり高温だったりした場合は地干し期間を長くします。中国では掘り取ったらそのまま横にして乾燥するまでそのまま置きます。私は根を上にした方がいいと思います。それと機械で刈ると量が多くてもあまり疲れない感じで、特に農業をする年上の方にはとっても便利

な方法だと思っています。(李バイ)

○初めて日本の農家に行くから、多少緊張感があったけれど、井上さんと話し合うと緊張感が全然無くなった。(うかがったのが) 外国人が多かったが、それにも拘わらず心から話してもらって、すごく楽しかった。(魏剛)

○井上さんが話をしてくれたときは…一つ一つ『何故』『どうなる』のという理解ができて、とても楽しかったです。(張晶)

当日は祭礼の日だということで、井上さんの奥様が昼食を用意してくださいました。「日本に来て初めてお母さんの家庭料理を食べた私は自家に帰った感じがして涙を流しそうでした」と金善湖さんは書いています。留学生には得がたい体験でした。



○畑はすごく広くて午前と午後2回に作業を分けてやっています。昼の時、井上さんの奥さんがいろいろな料理を作ってくれました。みんなの疲れが取れました。幸福の時間はいつも短くてすぐに別れの時になりました。みんな離れがたいながら車に乗って帰りました。(周)

今回の試みに参加した8名のうち、日本人は一人だけでした。留学生は皆、都会っ子です。彼らの感想をいくつかご紹介します。

○今回の農家体験で僕は労働者である。活動しながら農業の知識も勉強している。落花生は千葉の名産であり、皆食べる時は「おいしい、おいしい」と言いますが、栽培はこんなに大変だと思わなかった。今回の活動を通して十分体感して農家の気持ちと農作物の大切さを知り

ました。これから食べ物は無駄にしないように生活すると思っています。(周洪)

○二回の出会いで井上さん一家ととても仲良くなって、一つの家族のようになりました。お別れのとき、泣いていた学生もいました。農業の手伝い、日本でも自分の国でも人生の中で初体験でした。私にとって最も大切なものです。落花生の成長過程など、いろんな農業の知識を知り、日本の農家、異文化も経験することができました。さらに、農作業を通じて人際関係、人と人はこんなに交流しやすく、こんなに心地よい感じになり、異国でも短い間にこんなに仲良くなるのが嬉しいのだということにも驚きました。農業はこんなすばらしいものだとはじめて感じました。(王)

○私は千葉県生まれの千葉県育ちなので、



千葉県で有名なものといえば落花生であり、有る程度落花生がどのように作られ、収穫されるのかというのは知っているつもりでした。ですが、今回、落花生について調べてみると、落花生の由来など知らないことはたくさんありました。…今日、日本では農業が注目を浴び、ベランダや庭で家庭菜園をする人は多くなっています。今の農業は昔と違い、耕したり種を植えたり、刈ることのできる便利な機械で作業をします。なので、以前より大変ではないかも知れないけれど、それでも農業は重労働で魅力を感じる事ができず、継ぐ人がおらず、放置された畑がたくさんあります。そのような放置された畑を借りて、学校や企業が、農業体験をする活動もあるようです。今後、農業が重要になると思うので、注目していきたいと考えています。 (今枝)

後日、水土里の高橋さんが井上さんからことづかった落花生を沢山届けてくださいました。報告会では調理担当の李心欣さんが調理してくれて、審査に当たった教員もお相伴に預かりました。日本とは少し異なる味付けも今回の取組の「成果」の一つのように思えました。

私も初回だけで挨拶がてら学生に同伴しましたが、井上さんの奥さんが「まあ、皆、こんなに日本語が上手なのね」と驚かれ、「この頃は日本の若い人は(農家に)近寄ってもくれないのにねえ」と言われたのが心に残りました。敬愛大学国際学部は昨春、佐倉の地を離れました。我々にも地元でできるはずだったことが沢山あったことに改めて思い至った経験でした。

(文責 村川)



首都圏における日中交流史の過去と現在

蔡萍・殷奇松・邱運霞・唐麗・羅英・李智超

二つ目のグループは、首都圏における日中交流史の過去と現在、戦前・戦後の日本における中国人の活躍や定着に関する研究を行っていました。グループの学生のレポートに従ってご紹介します。（図表は省略してあります。）

I 日本国内における中国人数の増加（担当 邱運霞、李智超）

- ・日本にいる外国人登録者数の推移—中国人の増加が一番高い
- ・都道府県別外国人登録者数の推移（法務省入国管理局）—首都圏に多数の外国人が住んでいる。
- ・外国人「定住者：」登録者数の推移
「定住者」の外国人登録者数は23万7607人で、平成11年に比べ2万2260人（10.3%）の増となっており、引き続き増加傾向にある。中国人の「定住者」は外国人登録者数で2番目である。

- ・永住者数は全体として増加傾向にある。特別永住者数は減っているが一般永住者数は増えている。
- ・中国人の永住者は増えているが、2000年の全体構成比で1割にも満たない。

II 現在の日中経済関係—中国の経済発展（蔡萍）

- ・中国の経済成長は1978年からの改革開放政策の実施により、漸進的な市場化改革を通して大きな経済成長を遂げた。
- ・2007年までの29年間で、中国のGDPの年平均成長率は世界経済の年平均成長率と比べて3倍に達した。また、同期間における一人当たりGDPは、中国のGDP年平均成長率が1%高まるに連れて約0.25%上昇している。
- ・上海は中国経済発展の代表都市である。改革開放前（1978）と開放後の上海の写真を比較するとこれが明らかである。



日中貿易の拡大（羅 英）

- ・ 2000 年から 2008 年の間を見ると工業製品の輸出の伸びが目立っている。
- ・ 近年、電気機械と一般機械の輸入が増加している。
- ・ 1990 年代前半には、日本と中国（香港を含む）の貿易の急激な拡大があった。特に、衣類等を始めとする輸入が拡大する。2000 年代に至り再び急速な拡大を示している。

III 食文化（中国料理と中華料理の相違） （唐 麗）

- ・ 中国料理と中華料理の相違
中国の 8 系（山東料理、江蘇料理、浙江料理、安徽料理、福建料理、広東料理、湖南料理、四川料理）
日本の 4 系（北京料理、上海料理、広東料理、四川料理）
①中国料理の中に日本式ラーメンや日本式餃子は無い。
②中国の Fast Food はチャーハン
③日本では焼き餃子が人気だが、中国の北方では水餃子が人気、南方ではワンタン。
④中国料理は、中国で食べられている本格的な料理。中華料理は日本風にアレンジされた中国料理。
四川料理－特徴は辛い
上海料理－特徴は甘い
北京料理－代表料理は北京ダック。万里の長城と同じくらい有名である。
広東料理－点心、褒湯が有名
- ・ 中国の地方料理の特徴
南淡（薄味） 北咸（塩味） 東甜（甘い）

西辣（辛い）と地方で特色がある。

主食においては、北の粉・南の粒といわれ、北方では小麦粉を用いた食材（餃子・麺・饅頭など）が一般的。

南方では米を主食としている。

現代では流通も発達し、北方地帯で日本の農業技術者が米を育て、米食も進んでいる。

IV 日本で活躍する中国人（殷奇松）

李光哲（全日本中国留学生学友会会長）は現在、東京工業大学の博士課程に在籍している。中国人留学生たちを牽引して日中友好のイベントなどを数多く開催している。そこには日本人に本当の中国の姿を知ってほしいという思いがあるそうだ。

一方、日本の芸術、文芸分野で活躍している中国人を 2 人紹介したい。

まず陳敏（二胡奏者）は 1967 年、中国蘇州生まれ。上海越劇院オーケストラで活躍後、91 年に来日。97 年から本格的に音楽活動を再開している。テレビのテーマ曲や映画音楽、ジャンルを超えたコラボレーションを積極的に行うなど、二胡の可能性を追求している。

2 人目は楊逸（芥川賞作家）「時が滲む朝」で 2008 年 7 月の第 139 回芥川賞を受賞した。芥川賞の中国籍の受賞者は初めてである。

V 実地見学

2009 年 7 月 14 日、愛新覚羅溥潔仮寓（千葉県稲毛区稲毛一丁目）を訪ねて

参加者の感想

蔡萍：皇帝の弟の家にしては小さすぎる。

可哀想。北京にある故宮と比較しての感想です。

邱雲霞：気持ちの良い場所で良い家でした。お庭も素敵。

羅英：小さな家でびっくりしました。皇帝の弟の家として小さすぎたからです。

李智超：小さな家でびっくりしました。

唐麗：もっと時間をかけて展示されている資料を読みたかった。資料が面白い。

7月21日 横浜中華街、池袋唐人街

・横浜関帝廟では、中国式の参拝をしたが、生まれて初めての経験だった。親の世代はともかく、若い世代には関帝廟を参拝する習慣はあまりない。

・関帝廟は、日本の中国人に人気がある。

・中華街には子弟の教育のための学校が早くから創られていて、感動した。

・横浜中華街の飲食店のデザインは昔の中国の建物に似ている。また、中国の観光地に来たみたいだった。

・池袋では、今中国で流行しているものが手に入る。多くの中国人向けの商店が集まり、とても便利である。



ネパールにおける小学校建設の為の支援活動

タパ・プスカル、アディカリ・アルジュン、ウメス・シルワル、サンギタ・カトリ、ダッラコテ・クマル、パンデ・ビレンドラ、ギミル・ハリパラサ、タマン・チャクラ

3つ目のプログラムはネパールからの留学生8名によるものです。いつもその団結力と行動力に驚かされる彼ららしく、「ネパールで貧困で困っている子供たちの教育のため学校を作る」という大きな目標を掲げました。母国にいる時からボランティア活動の経験をもっていたり、敬愛大学でボランティアの科目を履修した者がリーダーシップをとったようです。

○私は高校生の時からボランティアなどに興味があって、いろいろな所でボランティア活動に参加してきました。ネパー

ルでは Nepal Red Cross Society, Lions Club Internationalなどにメンバーとして参加していました。日本で住んでいるネパール人が作ったNPOなど日本に来てからも色々な活動をしています。敬愛大学に入ってもボランティアの科目をとっていました。今回、敬愛プログラムの話が出てきたとき、ネパールで貧困問題で困っている子供たちのため、何かできることで助けてあげようと思ってこのプログラムに参加しました。（アルジュン）

ネパール大使館や国際ネパール協会日本



(International Nepali Community Japan)の協力を得て、2009年9月27日に都内でチャリティーコンサートを開くことになりました。

○日本にいるネパールのシンガーやダンサーを呼んでチャリティをやることに決まり皆準備を始めました。日本に住んでいるネパール人のために日本にあるネパールのメディアとホームページ(www.nepalijapan.com)に宣伝を載せました。チラシを作ったり、皆にメールを送ったり、声をかけたリイベントのためにホールを予約しました。(アルジュン)

この日のイベントで18万円が集まり、国際ネパール協会日本から10万円の支援を得て、メンバーの一人パンディ・ビレンドラさんが28万円をネパールの小学校に届けました。小学校の建物とトイレを建てるために寄付したのです。順調な活動のように見えたが、実施に至るまでには問題もありました。

○ネパールに小学校を作るためには土地の問題が残っていました。ネパールには使っていない土地がいっぱいありますが、その土地を使うには政府の許可が必要になる。ただ国側からしてみれば、教育したくてもできない環境だったから、小学校を作るなら、(空いた)土地を提供したいと考えて、使わせてくれました。その後、私たちは学校を建設するために必要な道具を買いに行きました。必要な道具とは、のこぎりやチェーンソーや木を集めました。建築し始めて1カ月たってやっと学校ができました。私はすごく嬉しかった。(アルジュン)

彼らはとりどりに達成感を記しています。

○大学の4年の間に、こんな大きなことが出来てすごく嬉しいです。For Human by Human(人間のために人間のできる事を)を心から感じ、自分のためでなく社会の困っている人間のためにできることをやらなければならないと思いまし



た。 (タパ・プスカル)

- 敬愛大学の敬愛プログラムは学生の学外活動のチャンスを与えるプログラムです。私たちの目標は2単位もらうことよりも楽しいプログラムにしたいという事でした。プログラムの利益をできるだけ多く集めて、ネパールの貧困問題で困っている子供たちに教育の光を与えたいと思ってプログラムに参加することを決めました。 (サンギタ・カトリ)

彼らの目はさらに「未来」を見えています。

- 目的が達成されていたかどうか、この間、建設した学校に連絡を取ってみました。そしたら子供たちが楽しそうに勉強しているということで、嬉しくて涙が出てきました。

この敬愛プログラムでネパールに学校を建設したことによって、貧しい子供たちが勉強できる機会を提供できたことは、私にとっても勉強になりました。子供たちのために必要な道具を日本で購入して、国に帰り、子供たちに直接渡したいと思っています。また（今後）しっかりと教育できているか私自身で確かめたいと考えています。テストを行ってどのくらいのレベルにいるかを測定し、生徒にあった教育を与えるカリキュラムを作りたいと思います。

(サンギタ・カトリ)

3種の「敬愛プログラム」をご紹介します。始まったばかりのプログラムです。来年以降、更なる展開を期待したいと思います。 (文責 村川)



国際学部のビジネス・コースでは、1年次に「房総の歴史と自然/環境」、2年次に「千葉の経済構造」の授業を開講している。そして2009年度からは3年次に「千葉経済特殊」という授業を開講し、更なる充実を目指している。これら3つの講義は、3年間を通して、学生たちに千葉県の実情（自然・環境、経済構造そして県下の経営者（企業）の具体的な経営に対する姿勢（経営姿勢）などを学んでもらい、千葉県の「魅力」に今以上に関心を持ってもらいたいというビジネス・コースの教員全員（発案者は高田洋子教授）の気持ちを込めた、1年毎の積み上げ授業として設置されたものである。まだ実験的ではあるが、上記の要素以外のものをも加味して、最終的に、「千葉学」なる学問にまで昇華できればと、考えている。

ここでは、2009年度に実施したリレー講義を受講した学生が書いたレポートをまとめている。

第1回目（11月24日）

マブチモーター（株）経営企画部経営企画グループ（今村知文、田宮孝の両氏）

「マブチモーターの経営理念、戦略、活動について」

鄭 星（078070）の感想文

マブチモーターは小型モーターに特化した会社で、その世界シェアの半分以上を占

める。全製品をアジアを中心とする海外の工場で生産し、日本には本社と研究所のみがある。製品は、自動車伝送、音響・映像機器、情報・通信機器、家電機械そして電動工具などである。

マブチモーターの標準化戦略は「何をやらないか」、他社と「違うことをする」ことが重要だという。マブチは標準化戦略を進める上で取捨選択を明確にし、低価格生産による成長を継続してきた。すなわち、標準化戦略を基礎にコストリーダーシップ戦略により競争優位を実現してきた企業である。

コストリーダーシップとは競合する他社よりも相対的に低いコストで活動する能力を持つ企業が、それを競争力の源泉として、業界内での競争で優位にある状態またはその実現をめざす競争戦略のことである。企業は低コスト体質を実現することにより、価格設定の自由度が大きくなる。販売価格を下げて販売量や市場シェアの拡大をめざしたり、他社と同等の価格で販売して相対的に高い利益率を確保したり、また買い手側の値引き要求や供給側の値上げ要求に対しても対応できるなど、様々な点でメリットがある。

マブチモーターは、1964年の中国（香港）進出を皮切りに、台湾、中国（広東・大連・江蘇）、ベトナム（ホーチミン・ダナン）など、アジア各地への生産シフトを開始した。1980年半ばまでに海外100%の生産

体制を整え、グループとしての生産効率を向上させた。製品設計・開発段階からコスト管理、生産技術の改善、部品の調達グローバル化による体系的なコスト低下にも取り組んでいる。

マブチモーターは顧客の様々な要求に対応する困難に直面して、「より良い製品をより安く、安定的に提供することが需要拡大に結びつく」という考えから、「標準化戦略」を決定した。つまり、規格品を大量購入する企業を相手に、高品質を維持しながら、大量生産による低コスト化の道を選択したのである。これにより、マブチモーターは急速に売り上げを伸ばし成長路線に乗ったのであった。マブチモーターの魅力は他社に先駆けて「標準化戦略」と「コストリーダーシップ戦略」を取り入れたその先見性とその決断力を備えた点にある。つまり大局的に将来を見据えた「選択と集中」の能力を備えていた点にある。

第2回目（12月1日）

三立機械工業（株）－代表取締役：中根明氏

「廃電線のリサイクル機器で圧倒的なオンリーワンを目指す」

ポウデル・ナラヤン（078167）

何かの仕事をする時や会社に入社する時、自分がその仕事が好きであると言うことが大事であることを、私は三立機械工業（株）の社長さんの説明で理解した。確かに、自分が興味を抱く仕事であれば、難しい仕事でも楽しくやることができると思う。

さらに、今日の世界は技術の時代である。だからこそ、私たち自身の力では凄く

時間がかかる作業を簡単に終わらせる機械の発明・改良は永遠に続く仕事であろう。三立機械工業（株）も将来を考えて、今の世界で増え続ける「廃棄物」を少しでも減らすことができる、環境に優しい機械を、この世に作り出している会社だと思った。

実際に先生と一緒に三立機械工業（株）に行ってみ学した廃電線のリサイクル機械は非常に良いアイデアを駆使して製作されたものであった。中根昭社長から機械の利用方法などを実際に廃電線のリサイクルの工程を見せていただきながら、説明してもらった。一番大きなケーブルから小さなコード線まで簡単にリサイクルされ、ビニールと金属（銅）に分別されてできた。これらの分別されたものはすべて再利用が可能との説明をうけた。だからこそ、この機械は今の世界の必需品であり、世界にウケル商品であると思った。

最後に、自分が興味を持ち、これからの次世代をも考えるビジネスであれば、間違いなく成功できるチャンスが多い、というのが、三立機械工業（株）からのメッセージなのだと感じた。私も、これからは仕事を探す時や何かを行う時には、まず第一に自分がそのことに興味がわくかどうかを基準にして判断していきたいと思うようになった。

第3回目（1月12日）

JA 富里市常務理事 仲野 隆三氏

「食と農業について」

李 美英（078196）

講義の中で韓国企業が（アフリカの）マダガスカル農地を99年間賃借したこと

を聞いた時、アヘン戦争で香港が99年間イギリスに租借されたことを思い起こした。もちろん、両者はまったく関係ない。ただし、土地というのはいかに大切で、重要なかを思わなければならない。そうでなければ、中国政府も香港の帰属問題で強くでなかったかも知れない。特に、農地は人が生存するための必需品であり、依然として、農民たちの命であろう。政府が勝手に農地を他国に賃貸してしまうことは、農民たちの命を絶つことに等しい。しかし、経済を中心としたグローバル化した現実世界では、やはり、お金を持っている者が勝利者になっている。経済力のある国は貧しい国から自分が欲しいもの、例えば、資源、人材、土地までどんどん買い占める。貧しい国は一層貧しくなり、富める国は一層富を増やしている。しかも持っていない国の痛みを知ろうともしない。やがてはお金を持っても食料が買えない時代が来るだろう。

我々、人類は土地を耕して食べ物を得て、ずっとこの地球上に生存し続けることができた。農業を捨ててはいけない。農業がなくなったら、生きていけない。これは誰でもが知っている。土地を耕すのは農民。しかしその行方を左右するのは政府だと、私は思う。個々人が農業に興味を持ち始めることは良いことだと思う。もし政府がより具体的で、有利な政策を出せば、再び農業は活気を取り戻せるだろう。例えば、中国の安価な野菜が日本に輸出される反面、富裕層の人々には日本の野菜、米、果物などが人気上昇中。日本の良質の農産物は中国だけでなく、周辺国にも人気がある。これらの農産物を海外に売るにはビジ

ネス・チャンス、アイデアも必要だが、政府の支援・政策も欠かせない。

今日はすでに資源をめぐる戦争の時代で、次は食糧ではないかという声も高まっている。経済的利益ばかりを追求している今日、農業も従来のやり方では生き残れなくなった。はたして、人類が直面しつつある困難に対処できるのだろうか。自然界は循環する仕組みになっている。これを人類が自ら破壊してしまい、今、焦って何とかしようとしている。何千年もの人類史の中で、産業革命あたりから世界大戦終結まで、また戦後から今日に至るも、戦争や自然災害などは増えつつある。その中で、私は食べるものがなくなって死ぬことは、人間として一番悲しいことだと思う。アジア諸国も日本のアグリ・ビジネスにヒントを得て、農業を重視するようになったら良いと願うしかない。

最後に、富里の農業について。ここの農民たちは土地の大切さを知っていて、土地を売却せず、農業を続けてきたそう。その恩恵を近くに住んでいる私も受けていて、とてもありがたいと思っている。その農民たちが汗をかいて作った野菜を自分で値段をきめられないとは、何ということか。普段、スーパーに並んでいるいろいろな野菜が入った袋詰パックを見て、なんと種類が豊富で、食べるのに手間がかからず便利な商品と思っていたら、これも利益を追求する企業の「工夫」だとは、改めて驚かされた。

第4回目（1月19日）

諏訪商店〔房の駅〕 マーケティング企画室：香取 慶紀氏

「千葉産にこだわるをコンセプトに展開する販売業」

胡 義雲 (078070)

私は(株)諏訪商店〔千葉特産の小売販売業〕の講座を聞いてから、この企業がなぜ2007年3月に千葉元気印企業大賞(優秀経営賞)を受賞したのか判ったような気がした。企業からいらっしゃった香取さんの話を聞いて、この企業についてとても印象に残ったのは、以下の3点である。まず第1に、諏訪商店は今日の日本の不景気にもかかわらず、多くの同業者と競い合って、生き残っている原因が絶えず商品開発を行っていること。しかもその購入層は50歳代の中年層だという。この世代の人々は、30歳から40歳にかけて家や車のローンを払い終え、すこし貯蓄が生じ、そのため安全で、美味しい物を好む傾向にある。確かに、価格が高くても諏訪商店の開発商品は人気があり、売れている。諏訪商店は千葉県内の農家や漁協、加工メーカーと連携して、千葉の素材にこだわった商品開発に努めている。千葉産の素材にこだわる販売方法は、「顔」の見える商品として中年層に「安全」を売り込んでいるように思われた。第2に、同店の社員が使って

いる言葉や朝礼などが挙げられる。そのユニークさは、例えば、「お疲れ様」の代わりに「わくわく様でした」、「すみません」の代わりに「ありがとうございます」と言う。私たちは確かに「わくわく様でした」と言われると、何となく元気な気持ちになる。また「ありがとうございました」と口に出し、他人に対して感謝の気持ちを抱いて働くと、仕事の能率がupするとのこと。さらに元気な朝礼も納得させられた。朝礼後、清掃するそうだが、周囲がきれいになると何故か自分の心も清らかになり、一日中気持ち良く接客ができるそうである。最後に、諏訪商店の経営者と社員が丸くなって心を通わせ、企業の利益を伸びるように奮闘している姿勢である。

以上から、諏訪商店の経営者たちは千葉の素材にこだわり、そのこだわりを介して開発し、なによりも千葉を元気にする目標をめざしたことが、成功した原因であった、と理解した。企業の成功への王道は、儲けようとする前に、諏訪商店のように工夫を重ねて、まずは地域を、そして可能ならば国を元気にしようとする企業になることが成功の秘訣であるように思われた。

(文責 山本健)

織井 啓介

2009年2月22日（日）～24日（火）の3日間、福島県天栄村の「ブリティッシュ・ヒルズ」に英語および英国文化の研修に行きました。

ブリティッシュ・ヒルズは、英国のマナーハウスを模した本館と、英国チューダー様式を中心とした8つの学寮（dormitories）を擁する国内で唯一の本格的な英語研修施設です。

今回は1年生から4年生までの18名が参加しました。うち、1年生10名、2年生4名、3年生2名、4年生1名の合計17名が参加しました。日本人学生13名、留学生4名の内訳です。ちなみに、男子7名、女子10名でした。

12月に事前説明会を開催し、12月17日締め切りで募集しました。2月2日に参加者向けにガイダンスを実施しました。引率は、教員2名（村川と織井）、職員1名（教務学生課加藤）の計3名、また施設を運営する神田外語キャリアカレッジの職員1名（五十嵐）が往路のみ同乗しました。

■ 1日目

22日の出発日は千葉駅前からバスで出発、往路のバス内では、参加者全員が自己紹介したり、施設の概要をビデオで予習しました。東関東自動車道から首都高中央環状線を経由して、東北自動車道に入りました。千葉・東京・埼玉あたりではまったく

雪は見られませんでした。館林を過ぎると、男体山や那須連山には雪が見られるようになりました。那須高原SAで各自お昼を食べて再出発。午後2時過ぎに白河インターで高速道を下り、いよいよBritish Hills目指してバスは山道を登り始めました。

標高1,000メートルですので、周囲はまだ1メートル近くの雪が残っています。白河インターを下りて、1時間ほど走ると、British Hillsの門をくぐり、チューダー様式の学寮群れ（dormitories）が見えてきました。参加者からははからずも「おおっ！」という声が上がりました。皆予想していた以上に英国様式の建物に臨場感を感じたようです。

14時過ぎにバスを本館前で降り、正面玄関脇に荷物を預けた後、ただちにAmbassador's Roomで研修全体のスケジュール説明とガイダンスを受けました。続いて、マナーハウス本館の見学ツアーです。King's Room, Queen's Roomといった豪華な私室、百科事典や貴重な歴史的図書がたっぷりのLibraryなどを見学しました。とくにLibraryはドラマ『花より男子』のロケに使われたのを記憶しているメンバーが多く、3日間の滞在を通じて記念撮影が絶えませんでした。本館の見学を終えると、めいめい荷物をピックアップして、宿泊するdormitoryに向かいました。なお、部屋にはハリリー・ポッター式のマントが備

え付けられており、本館との移動の寒さ対策として活用しました。

さて、1日目の英語のレッスン（16:00～17:30）は、タイトルが“Home-stay English”、講師はイタリア系ハーフの英国人でした。自己紹介をするための多様な英語表現を学び、British Hillsの導入レッスンとしては適切な内容でした。

18時からの夕食は Refectory で取ります。Refectory とは、英国の学寮などの食堂です。マナーにうるさく、Tシャツ・短パン・サンダルなどは不可です。正式 dinner 以外はビュフェ（buffet）方式での食事で、食後は食器を自分で運びます。

夕食後はめいめい過ごしました。翌日のスケジュールに備えて、自室で早めに休んだメンバーもいれば、dormitory の共同の living room で会話やトランプを楽しんだメンバーもいました。スポーツでは温水プール（料金 300 円が必要）が人気でした。

■ 2 日目

8時に Refectory で朝食をとった後、2日目の研修は、9:00～10:30の“Pronunciation skills”のレッスンから始まりました。伝言ゲームからスタートし、他人にも分かりやすい発音技術の習得に向けたレッスンを受けました。ネイティブ講師が豪州人のため、やや聞き取りにくかったという声も聞かれました。

お昼は Refectory でいつもどおり buffet 方式のお昼です。Refectory での食事も3回目となり、すっかり慣れてきました。

午後の研修は、“British Wedding”というレッスンでした。カナダ人ネイティブが講師でした。まず研修室で、結婚に関する英

語の解説を受けた後、本館内の教会に移り、メンバーの中から花婿役と花嫁役を選んで模擬結婚式を実施、無事に結婚に至りました。

2日目の夕食は formal な dinner です。まず、研修室で日本人スタッフから英語で食事マナーの講義を受けました。たくさん並んだフォーク、ナイフ、スプーンをどの順番で使っていくのか、スタッフがスプーンをディッシュに盛ってくれる時どのような協力をしたらいいのか、など懇切なレクチャーを受けた後、Refectory の実習に臨みました。正式な dinner ということで少し緊張しましたが、事前レクチャーのお陰で迷うことなく、British manner による食事を無事に終えました。

夜は先生方と一緒に、パブ・ハウスで寛ぎました。施設内のネイティブ・スタッフも、日中の職務を終えるとパブ・ハウスに多く集まるので、できるだけネイティブと話すよう努めました。2日目の夜は雪になりました。外は相当寒いのですが、パブ近くのの木々にブルーとオレンジ色のイルミネーションが施されているので、クリスマスのような幻想と美しさを感じました。これで雪の中の研修が忘れ難いものになりました。

■ 3 日目

3日目の午前中のレッスンはスコーン作りの実習です。英国では伝統的に午後のお茶が重視されますが、人気があるお菓子がスコーンです。90分の授業の中で、スコーンの生地作りから始まり、60分程度でオーブンに入れるまでに進みました。焼き上がりを待つ間、階上でお茶・コーヒーで疲れを癒しました。最後の5分間に実習室に戻

ると、皆がオーブンに入れたスコーンが1つの失敗もなくふっくらと焼き上がっており、感動しました。1人あたり5～6個ずつ、家へのお土産として持ち帰ることができました。

これで British Hills の研修はすべて終了。11:45 に研修室にメンバー全員集まり、卒業証書が授与されました。ネイティブ・スタッフから1人1人に研修修了を記した Certificate が手渡されました。3日間の研修の労苦を裏り、全員ジーンと感動しました。

British Hills での最後の食事は、Refectory ではなく、パブで Fish and chips が昼食として出されました。これは、タラなど白身魚フライにフレンチ・フライド・ポテトを添えた英国のパブで最もポピュラーなメニューの1つです。

その後、「イエ・ショップ」という souvenir shop でめいめいお土産を買いました。ブリティッシュ・ヒルズ特製のケーキ、英国産のジャムやビスケットを始め、めい

めいたくさんお土産を買い求めました。

午後1時半、3日間過ごし離れがたくもなった British Hills をスタッフの皆さんに見送られて、バスで出発しました。緊張感が解けたのと、3日間研修をやり遂げた充実感で、ほぼ全員バスの車内でぐっすり寝てしまいました。往路と同じルートを経て、午後5時過ぎに無事に千葉駅前に帰着し、解散しました。

■参加者の感想

アンケートを取って見たところ、2泊3日という研修期間はベストだったとの答えが圧倒的でした。施設や食事も満足度はたいへん高かったようです。ただし、英語のレッスンの時間数はもっと多くてもよかったとのこと。さらに、夏休みに来てみたいとの声もありました。なお、今回の研修には、教育後援会からご支援をいただき、学生1人当たりの自己負担は2万5千円で済みました。大いに感謝しております。



Chapter 02

[第2部] 学生たちの活動

- 中国砂漠植林ボランティアを通して見た恩格貝「村」の誕生
- ワールドフェアを通して
- 海外旅行の楽しみ

山本 健

今年（2009年）の中国内蒙古での砂漠植林ボランティア活動には、本学の学生（卒業生を含む）3人と主婦3人そして私の7人が参加した。今年の活動では、千葉県下に多くのチェーン店を持つ優良企業の「銚子丸」から寄付金をいただき、旅行代金を廉価にできた。「銚子丸」様に感謝を申し上げたい。今回は植林する現場を第1回目（1998年）の恩格貝に戻し、本学の学生たちが植えた「わが子」との「再会」を試みた。ただし、すでに10年以上が経過していることもあり、名前を記したネーム・プレートはなく、さらにあたり一帯が林に成長したためか、「わが子」がどこにいるのか判別がつき難く、残念ながら「迷子」状態にあることを告白せざるをえない。

ところで、かつて植林基地を中核として殺風景だった恩格貝は、この10年強で数十戸から成る「村」に大変身していた。しかも、「村」の西側には舗装された公道が作られ、包頭方面からの車の往来が従来よりも頻繁になっていた。さらに「村」内にある十字路の近くには食堂が4~5軒固まって存在していた。これは、この恩格貝に外部からの多数の人的流入〔車の通行量〕があり、彼らに飲食などのサービスを提供するビジネス・チャンスが生まれたことを意味する。そう言えば、一番早く畑地となったかつての砂地には、ビニールハウス農場が出現し、蕪やトウモロコシそして葉もの

野菜が所狭しと植えられていた。大量の食材の確保が可能になったことも飲食業の成長に幸いしていると思われる。またこの「村」の南側には「沙湖」（南湖）があり、沙漠地域では優良の観光地となるなど、恩格貝は大変身を遂げていた。

約10年間にわたり中国・内蒙古での沙漠植林活動に参加してきた私には、この10年間の恩格貝の変化は、まさしく植林によって砂の移動が止み、緑が増え、人が増え、そして畑が増えるにつれて産業が興って町が出現するという経済史学の教科書で言う都市発展モデルの一事例を示しているように思われる。このように考えると、これまでの恩格貝での沙漠植林活動が、ドイツ中世都市の成立と農村の関係を専門にしている私の研究にとっても無駄ではなかったと確信するに至った。

このように、今年の恩格貝での植林活動は、これまで私自身の中で燻り続けていたボランティア活動と私の専門研究〔ドイツ中近世の都市・農村史〕との「断絶症状」ないしは精神的な分裂症的ストレス＜具体的には、中国、それも内陸部の内蒙古の、しかも沙漠地域での植林活動とヨーロッパ、それも沙漠の無いドイツの都市成立研究との無関連性から生じるストレス（？）＞からの解放をもたらし、大変有意義なものとなった。

帰国前日の9月19日は北京で観光旅行

三昧。万里の長城（八達嶺）はガスっており残念であった。しかし今年是中国建国60周年。これを記念する出し物が北京の天安門広場に設営されていた。中国の56民族を象徴する56本の巨大な支柱や巨大

なパノラマ・TVに映し出される中国の名所・旧跡などを見たが、やはりその規模に私は圧倒された。そして中国が複合民族国家であることを痛感した。



2009年中国沙漠植林ボランティアに行って

鈴木 美保

夏季休暇も終わりを迎える9月13日に、私は中国・内蒙古沙漠緑化ボランティアに参加した。急激な発展により様々な環境問題が発生していると報道されている中国だが、北京空港に着いて、首都北京には意外に緑があると思った。だが、寝台列車に乗って内蒙古地方に行くにつれ、山肌をさらしている山々や植林された木々などが車窓から良く見え、環境破壊が起きているのを実感した。またその周辺の土はかなり乾燥しているように見えて、深刻だと思った。

内蒙古自治区でも、沙漠へ行く途中、バスから見た土はやはり乾燥しているのか、砂ぼこりが舞っていた。恩格貝に到着し、沙漠散策へ出かけた。木が等間隔に植えられて緑の所もあった。はたまた灌木がまばらに植えられていて写真撮影に適した風景もあって楽しめた。

二日間植林作業を行なったが、思ったよりも涼しく、砂も冷たかったので作業はしやすかった。しかし、今だから告白するが、1m 20cmの苗木を植える穴を掘るのはキツかった。

二日目には記念の植樹をし、防砂林を作った。その材料は成長したポプラの枝を切ったものであった。私たちの植えた木々

も成長すればここまで大きくなるのだと考えながら、無駄な枝を切っていた。防砂林の材料の枝は、私たちより1日遅れて恩格貝に到着した関西学院大学の学生さんたちの分まで切った。最終的に私たちが植林した本数は316本であった。

二日間の作業を終えた翌日、モンゴル高原に行った。見渡す限りの草原は美しい風景であった。一泊した後に内蒙古自治区の首都フフホトに移動し、内蒙古歴史博物館を見学した。5・6階建ての大きな博物館であったので、半分しか見学できなかった。

再び寝台列車に乗って北京に戻り、万里の長城と天安門広場を観光して、一泊した。

この旅を通して、私はテレビが設置されてある宿泊地ではアニメを見た。日本のアニメが放映されていたが、中国のアニメよりも絵が良かったと思った。日本のアニメが中国でも人気があるはずだと納得してしまった。

全体的には良い経験をしたと思える旅であったが、しかし食べ物の違いは大きいと思知らされた旅でもあった。



高 鈺 洋

ワールドフェアが11月29日に、敬愛フェスティバルとともに、終わりました。今、思い出したら、ワールドフェアの日々はまるで昨日のことみたいです。頭の中に、メンバーの笑顔が浮かんできたり、踊りの音楽が流れ込んだりすることは幸せな、笑顔になれるワールドフェアが残してくれた大切なものではないかと思っています。

今回のワールドフェアは2006年以来、4回目でした。この前まではずっと佐倉キャンパスでやっていたようですが、今年は初めて稲毛キャンパスでやらせていただ

きました。ワールドフェアがここまで続いてきたのには、絶対どこかに魅力的なものがあるんだと思って、私もグループに入って、体験させてもらいました。

今、何度も考えていたのですが、ワールドフェアに入ってよかったと感じています。ワールドフェアは日本人と留学生をメンバーとして、大学祭のときに活動してきたイベントです。内容はさまざま。各国の豆知識の展示と環境問題を学べるクイズ、ロックソーラン節、世界料理教室など、毎年違っていているそうです。今年はパペットショー、料理教室、ロックソーラン、ファッ



ションショーを主な活動として、展示とクイズコーナーを合わせて行いました。

前述しましたが、ワールドフェアには魅力的なものがあります。当日に、メンバー全員とお客様が一緒に盛り上がっているのはもちろん楽しい場面でした。が、もっと楽しかったのはやはり準備の段階だと思います。

最初のメンバーを募集する段階から、最後の出来上がりまで、全力でやってきたみんなの姿はこのイベントの誇りではないかと思えます。

メンバーを集めてから、それぞれグループに分けるのですが、メンバー全員の団結力で、お互いに手伝ったり、応援したりもしました。ワールドフェアスタッフは一つの大家族みたいに準備を進行していきました。もちろん、一つのイベントを仕上げるには、いろいろなアイデアと発想が必要です。それは、一番難しいといわれています。もちろん、私たちも最初から全部のアイデアを完璧に持っていたわけではないのですが、みんなの討論を通して、一つ一つ決めてやっとアイデアを完成させたことは素晴らしいです。大変でしたけど、日ごろあまりしゃべらない人とも意見の交換ができ、すごく貴重な体験だったと思います。

アイデアが決まったら、次は実行です。私の場合は、掲示物グループに入っていたので、掲示物グループの視点から、感想を述べさせていただきます。

掲示物グループは大体掲示物全部を仕上げるのがこのグループの仕事でした。クイズの問題ポスターの作成など、試験教室の道具作成など、パペットショーの歌詞作成など、などなど、いろいろでした。掲示物

の作成のため、普段はみんなが授業スケジュールの隙間を全部取り出し、大学祭に迫る前の一週間は毎日夜九時ぐらいまで、おしゃべりしながら、楽しく作成仕事をやってきました。準備時間はすごく短かったのですが、みんな、自分の力をできるだけ発揮するようになっていたので、完成にぎりぎりだったけど、無事にきれいにできたのです。

掲示物グループと同じ場所で準備していたのはソーラン節のグループでした。同じ学生として、ソーラン節をみんなに完璧に教えられるように、一生懸命練習しているメンバーの姿に私は感動の気持ちで、たまりませんでした。

もちろん、これ以外に、他のグループのメンバーも頑張っていました。各グループがきちんと自分の任務を達成したおかげで、ワールドフェア全体が成功したのではないかと私は思います。

ワールドフェアが終わったけれど、私はフェアに対して、ありがたい気持ちを抱き続けています。なぜかという、ワールドフェアが私たちに独特な環境を作ってくれたからです。

一つ目は、ワールドフェアを通して、今まで、ぜんぜん顔合わせをしたことない人と友達になれるようになり、学校にいる時間が以前よりももっと充実したものになるような気持ちを与えてくれました。それに、イベント準備の中で、自分と初めて知り合った人と力を合わせ、一つのイベントを作り上げるためのチームワーク体験もこれからの私たちの人生にとって、一つの大切な経験ではないかなあとと思います。

二つ目は、ワールドフェアの中に、いろ

いろいろな国の留学生がいたことです。そのために、自分と違う国籍を持っている人と交流する機会がイベントのおかげで、増えました。お話をしたり、手伝いあったりすることによって、お互いの国の文化を理解できて、違う国の人との接し方も勉強できたと思います。このような機会は普通の忙しい勉強生活にとってはごくごく貴重なチャンスです。

三つ目は、今まで、生きてきた世界を、クイズ問題など、ゲームなどを通して、勉

強できたのも、ワールドフェアの良さだと思います。わたしの場合、以前の自分と比べれば、世界の環境と諸国の事情に対してもっと関心を持てるようになりました。そのことに心から嬉しく感じています。

ワールドフェアの期間は短いものでしたが、わたしに人生最高の思い出を作ってくれました。このような活動の機会があれば、また参加したいなあと感じます。

参加させていただいて、本当にありがとうございました。



岩井 さくら

2009年10月25日から10月31日まで、私はカンボジアとベトナム旅行へ行った。その様子を簡単に報告したい。自分が大学を卒業する前に、どこか海外旅行に行こうと以前から決めていたので、自分の就職活動が一旦終わった9月ごろから計画を立て始めていた。ただの海外旅行なので、Jump Into A New World に載せられるような内容ではないことを初めに承知しておいてもらいたい。

もともと私と母の二人旅行を計画していて、旅行計画は母が中心となって熱心を立てていた。しかし旅行寸前で母がダウンしてしまい、キャンセル料ももったいないので、一人で行くことになってしまった。

目的地は、カンボジアのアンコール・ワットとベトナムのホーチミン市である。母の体への心配はあったものの、久々の一人旅にわくわくしながら、まずはホーチミン市経由でカンボジアを目指して出発した。行きの飛行機の中では日本へ旅行に来ていたホーチミン市在住のベトナム人の女性と友達になり、お互いの拙い英語でおしゃべりしながら時間が過ぎていった。一人旅の醍醐味は、色々な人と出会えることだなあと感じながら、カンボジアのシェムリアップに着いた。

行く先の国については、毎回簡単に予習しておき、歴史や地理を知っておくと旅に味わいが出るので今回も飛行機の中で本を

読んでおいた。カンボジアはポル・ポト政権下で国民の約4分の1が大量虐殺され、とても悲しい過去として残っているが、アンコール・ワットといった世界遺産によって観光業が発達し、少しずつ国全体に発展の兆しがあると書かれていた。

カンボジアに着くと手なれた感じで、ツアーの案内役のお兄さんがホテルまで送ってくれ、その日は一人での夕食となった。トゥクトゥク（自転車タクシー）に乗って、伝統的な影絵レストランへと向かった。ここでは、小学生から中学生くらいまでの子供たちが楽器を演奏しながら影絵を披露してくれた。言葉は分からないが、生まれて初めてのカンボジア料理と共にとっても楽しませてくれた時間であった。その日は早めにホテルに帰り就寝した。

次の朝、9時頃ホテルを出発し、他の日本人観光客と一緒にガイドの案内でアンコール・ワットへと向かった。同じ日のアンコール・ワットツアー仲間、優しいような老夫婦と若い家族旅行中の一家であった。ガイドをしてくれたニャーさんは、ベテランの日本語ガイドで、冗談交じりにいろいろ教えてくれた。

中には、「あの石像は京唄子さんに似てるんですよ〜。」という冗談まで飛び出し、日本の女優さんの名前も言えるのか……とびっくりした時もあったくらいだった。よく歩き回り、アンコール・ワットを一周

りしてお昼を食べ、2～3時間の休憩があった。その時間に、じっとしてられない私は、今度は街を散策しながら大きな市場の方に歩いていった。途中、ペットボトルを拾い集める子供たちと出会ったり、コーヒー店を開いている日本人にあったり、ぼーっと歩いてて電柱にぶつかったりと、ハプニングもあったが、なんとか到着し、現地の食やお土産など見る事ができた。

そして夕方、アンコール・ワットとは反対側だったが、夕日が沈むのでそれを見に行こう！とニャーさんが再び私たちを車に乗せアンコールへと出発した。夕陽を眺める場所は山の上の高台に登らなければならず、明かりのない山道を歩き、数十センチ

ある高さの階段をよじ登って、夕日の見える場所までたどり着いた。そこでの景色はとても美しかった。

カンボジア3日目は、トレンサップの湖に行き、水上生活をしている人々を見に行った。ガイドをしてくれた人は、どの人も笑顔なのになんとか悲しい表情をしていたような感じがした。船で案内をしてくれた男性と男の子は両方とも家族は誰もいないと言っていた。悲しい過去の悲劇は、現在でもカンボジアの人々の状況を取り巻いているんだなあと感じながら、クルーズを終えた。

素晴らしい世界遺産と伝統がありながら、人々の心にはどこか暗い影があるよう



な印象をカンボジアでは受けた。発達している観光業はこの国の発展に本当に繋がっているのかと少し疑問を感じたので、帰り際、チャーさんに問いかけてみた。そして、にっこり笑って「もちろん。」と答えてくれたので、少し安心した。自分がここにいることで、少しは役に立てたかなあと思いながら、今度はベトナムへと旅立ったのであった。

ベトナムのホーチミンに着いたのは、すでに夕方、街にバスで向かうと、カンボジアの街並みとの差に驚いた。高層ビルばかりが並び、町には活気があり、「都会だなあ・・・」なんて、感じながらホテルへと向かった。町は、バイクばかりで喧騒としていた。でも、時折街角で見る路上の喫茶店でおじさんや学校帰りの子供たちがくつろいでるのを見て「ああ、これがベトナムかあ・・・」と雰囲気を味わうことができた。

次の日は現地発着のメコンデルタツアーへと参加した。このツアーに関しては私自身とても気になって参加を決意したものだ。行きかえりのバスでかなり時間がかかるので、どうなるかと思っていたが、ここでは隣に座った日本人と仲良くなった。異国の地で会う日本人は、毎回、なんだか不思議な感じがするなあと思いながら、ベトナム人日本語ガイドの人の話に耳を傾けた。やはり、日本人観光客が多いため（たぶんおばさん達が特に）カンボジアのときと同じように客に仕込まれて冗談を勉強してきたんだろうと感じた。

メコンデルタツアーでは、メコン川によって作られた三角州の一部をボートに乗って周遊した。三角州の中には、いくつ

か島になっているところもあった。それぞれに、少数ではあるが人が住んでいる。メコン川と共に生きている人々の姿を見ることができた。

バスでホーチミン市まで戻り、ホテルまで戻るまでの間、ちょっと休憩と思い、初めての路上喫茶体験をしてみた。甘いベトナムコーヒーとプリンを頼み、街の喧騒を横目にホッと一息ついた。

夜ごはんは・・・と考え、せっかくなのでホーチミンのナイトマーケットに行くことにした。

マーケットでは、屋台が並び、とても賑やかだった。ごはんを済ませ、家族や友達にお土産を買い、ホテルへと帰った。

翌日はこの旅行の最後の日であった。早めに起き、午前中はガイドさんとデート気分と一緒に街を周った。ベトナムのおもちを使ったお菓子チェーンを路上で買って、ほおぼりながら街を見て回った。

それから、ベトナム戦争博物館を訪れた。ベトナム戦争はアメリカとの長期にわたる戦争で、多くの犠牲を生み出した。現在でも社会主義を掲げているが、街の中に目に見える格差を感じ、世界はどこに向かって進んでいるんだろうなあと、ふと感じた。

枯れ葉剤による悲惨な影響は、奇形胎児のホルマリン漬けや多くの写真によって表されていた。罪のないものが多く犠牲になる戦争は、世界のどこかで今も起きているが、絶対になくさなくてはならないと強く感じる事ができた。旅の最後に、とても得るもののある時間であった。

こうして私のベトナム・カンボジア旅行は終わったのであった。帰りの飛行機が大幅

に遅れ、真夜中に3時間近く待たされたのは大変だったが、まあ、それも旅のハプニ

ングとしてありがちなので、それを除けば良く遊んで、学んだ旅であったように思う。



Chapter 03

[第3部] 卒業生たちは今

- 日本語教育で国際交流
～タイと日本の架け橋を目指して～
- 敬愛、そして長崎から世界へ！

前野 文康

私はタイの国立キングモンクット工科大学の前野文康と申します。この度は、敬愛大学の卒業生である私の卒業後の経緯をご紹介します。皆様が進路を考える際の一例になればとのことで、執筆させていただきました。

敬愛で学ぼうと思ったこと

高校生の時、国際協力を行うビデオを見て、是非このような世界で頑張りたいと思うようになりました。ただ、私の性格上、将来計画を綿密に立てなかったので、漠然と、「国際協力ならば JICA の青年海外協力隊（以下、協力隊）だ」と考えておりました。

敬愛大学への入学後、2年が過ぎた頃から卒業後の進路としての協力隊参加を具体的に考えようと思い、募集要項を確認いたしました。しかし、その時に、自分には専門がないと気付きました。農業、保健、土木、教育など様々な募集職種がありますが、ほとんどの職種に私は応募資格すらないと、ようやくわかったのです。では、どうするべきかと考えていたところ、敬愛大学で日本語教員養成講座が受講できることを知り、すぐに申し込みました。

日本語教育を通じた国際交流とは

皆様の中にもいらっしゃるかもしれませ

んが、私は、在学時、「国際協力とは最低水準の生活程度を保てないほどの、社会的に弱い立場の人たちに対し、何らかの協力を行うことだ」とだけ、考えておりました。そう仮定すると、「日本語教師の仕事は自分が目指しているものと違うのではないか」との疑問を抱くようになりました。実は、タイへ赴任してからもしばらくは、そのことを考えながら授業に臨んでおりました。

タイでのとある一日

では、実際に私がどのような時間の使い方をしているのかをご紹介します。

毎朝6時半に起きます。50分ぐらいで身支度をして、アパートを出ます。アパートから大学まで車で通勤しています。大学まで約50分です。

午前8時半ごろには、大学に着きます。朝食はいつも大学の食堂でとります。ちなみに、料理はごはんの上におかずをかけたようなもので、一皿20バーツ（60円）ぐらいです。

その後、教員室で授業の準備をします。

午前10時から2時間、2年生の授業があります。作文の授業では、自作の教科書を用い、授業を行います。また、この作文の授業で研究を行いました。

12時から1時間、昼休みです。昼食は、大学の食堂で買ってきて、教員室でとりま

す。また、週に1回は、同僚の日本人の先生と勉強会を行っています。ちなみに、その先生と論文を書きました。自分一人で考えていても、なかなか思いつかないことも、他の先生との話し合いの中で見つげられることもあります。

次に、午後1時から2時間、これも2年生の会話の授業があります。こちらは、みんなの日本語の第25課から第50課までを教えます。タイ人の先生は、タイ語で文法解説の授業を担当していて、日本人である私は、会話の運用能力をつけてもらうことを目標に授業を行っています。また、会話の授業の一部の時間を使って、漢字の授業も行っています。漢字の提出順は、みんなの日本語に沿っています。ただ、私は漢字の構造を正しく理解し、きれいに早く書くためには、筆順の勉強が欠かせないと思い、筆順を記入する欄を設けています。これを宿題として、提出してもらいます。そして、いくら、間違いがあっても、私は正解は教えません。正解は辞書を見れば、わかりますし、自分自身で書き直すことで、自分の間違いに気づくことになり、記憶につながりやすくなるのではないかと考えるからです。また、各漢字が実際に使えるように、各漢字の単語を載せています。タイ語表記もあります。時間がかかりましたが、自分で打ちました。

午後3時から、1時間半、当大学内の東海大学アジア事務所にて、日本語を教えます。ここで、勉強した学生は、半年後には、日本の東海大学へ留学します。

そして、授業が終わってから、午後7時ぐらいまで、翌日の授業準備をしています。その時間には他の先生は帰宅していま

すが、私は大学にいるのが好きなので、充実した時間を過ごしています。

また、土曜日は、大学は休みですが、非常勤でさくら日本語学院で教えています。日曜日は、お付き合いしているタイの方と過ごしています。

自分ができることを最大限の努力で行う

タイで働くようになってから、4年が過ぎようとしている現在、日本語教師としてタイへ来て、本当に良かったと考えております。

その理由の一つ目は、タイ人の寛容さです。私は、来タイする前までは、自分の能力に関して自信がありませんでした。ましてや、自分が教師になってもいいものなのかと不安に思っておりました。日本にいるときは、何をしても失敗してはいけないと考え、成功する可能性が低いのなら挑戦することをやめようと判断することもありました。しかし、タイは日本のような厳しさがなく、何でもやろうと思ったら、始めてみればいいのだと、思えるような社会なのです。それで、今まで、徐々にではありますが、ステップアップできていると思います。

今後は、キングモンクット工科大学ラカバン校産業教育学部のジャーナルにタイ語で論文を書く予定です。そして、いずれはタイ国立チュラーロンコーン大学の修士課程「外国語としての日本語教育」を修了し、タイと日本の架け橋になれるような仕事をしていきたいと考えております。

次の理由に、タイで終生の伴侶を得たことが挙げられると思います。外国人と結婚

当 初	民間日本語学校 ラムカムヘン日本語教育振興学校
現 在	国立大学 キングモンクット工科大学ラカバン校 産業教育学部社会言語学科 日本語科
	研究活動 キングモンクット工科大学ラカバン校で働きながら、研究活動を行っています。 この9月には『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要第9号』に論文が掲載されました。
	出版活動 非常勤として働いているさくら日本語学院の教材執筆にかかわり、タイ全国で販売する予定です。

することは、国際家族になるということです。自分の家族と妻の家族が、つながるということです。

今後しようと思っていること

私は日本語教師を一生の仕事にするつもりです。まだまだ、経験が浅く、質の低い授業をしていますが、将来は、もっと経験を積み、国際交流・協力ができたらと考えています。

また、架け橋とは、あるものとあるものをつなぐことだと思います。ですから、そのつながる方法の一つとして、言葉の教育である日本語教育は意味があると思います。国と国をつなぐことができるのは、私でもありますし、私の教えた学生でもあります。これがどんどん広がっていくことを望んでいます。

そして、世の中で起きる問題のほとんどが、互いを知らないがために起こると思います。それは、皆様の身近なことに対しても言えると思います。

例えば、朝の忙しい通学途中に、前をのろのろ歩く人がいたとします。急いでいる

人なら、「なぜ、もっと速く歩かないんだ。邪魔だ」と思うでしょう。そして、その遅く歩く人に対して、嫌な感情を持つでしょう。しかし、もしも、その前を歩く人が土地に不案内な人だと知っていたら、ただ単に、「邪魔だ」とは感じないのではないのでしょうか。

つまり、人とは互いに知り合うことで、友好的な関係を構築できる存在だと思うのです。しかしながら、その手段には様々な方法があると思いますが、言葉も通じない外国人同士では、なかなか意思の疎通ははかれません。そこで、言語教育である日本語教育が重要になってくると思うのです。

敬愛生へのメッセージ

今、世界は100年に1度と言われるような、不況で、就職難だそうです。日本語教育に限って言えば、海外で働くことを考えれば、働き口はたくさんあります。また、私は、国際学部で勉強をするなら、海外へ行くのも良い選択肢の一つだと思っています。その一つとして、私は、日本語教師をおすすめします。そして、皆様自身が、

それぞれの国際協力をなさったら、素晴らしいことだと思っています。

私はタイへ行く前は、海外で働くのは大変なことだと思っていましたが、出てしまえば、何とかなるという面もあると思います。国際学を学び、日本語教育も学んだ方だからこそできる国際協力をしていただければと思います。

また、これは、私のことではありませんが、以前、当大学に勤めていた、ある先生

は、現在、協力隊として、エルサルバドルに派遣されています。また、ある先生は、国際交流基金の日本語教育ジュニア専門家として、ウズベキスタンに派遣されています。

最後になりましたが、皆様が、敬愛大学国際学部の素晴らしい先生方と共に国際化に対応できる人材として考え、ご活躍されることを期待しております。



平野 志穂

1. 大学1期生のその後

15年前、高校生の時にUNICEFのアフリカ難民キャンプレポートをテレビで見た私は、出来たばかりの敬愛大学国際学部国際協力学科へ1期生として入学しました。当時の夢は国際協力の専門家になること。ボランティアではなく、国際協力を仕事としていくために、どんな道を歩んでいけばよいのか考えた末の進学でした。

大学生のときには学内の活動として模擬国連サークルを作り、地雷問題や女性の権利などについて勉強をしたり、フィリピンスクーリングに参加してNGOやJICAのプロジェクト現場を視察しました。また、学外では、大学4年時に農村開発を行っているNGOである日本国際ボランティアセンターでインターンとして業務を学ばせてもらいました。

卒業後にはフィリピンの首都にある巨大スラム地域にて、住民の自立を支援するNGOのプロジェクトコーディネーターとして奨学金、収入向上、栄養改善プロジェクトに携わり、NGOの組織運営やプロジェクトマネジメントを学びました。

2005年からの2年間は青年海外協力隊、村落開発普及員としてガーナ農村部で地域保健総合改善プログラムに関わり、リプロダクティブヘルスや感染症予防の活動に関わりました。ガーナではJICAの技術協力プロジェクトとして現地NGOがプログラ

ムを実施していましたが、NGOスタッフのモチベーションの高さに感動するとともに、地域発展に人々の健康が欠かせないことを実感しました。

現在は、今までの経験をもとに、昨年長崎大学大学院国際健康開発研究科に入学し、公衆衛生を学んでいます。

2. 国際健康開発研究科の生活

長崎大学大学院国際健康開発研究科は、国際保健の実務家を養成するプログラムで、2008年に新設された研究科です。実務家養成のプログラムなので、入学する学生の大半はすでに海外の現場での経験を持った社会人です。

大学の授業は熱帯医学、母子保健学、緊急医療援助論など保健分野の授業に加え、人間の安全保障論など開発途上国の現場で働くうえで必要な分野、研究をするうえで必要な疫学、統計学などもあります。1年時の夏には3週間の短期フィールド研修があり、バングラディッシュを視察します。また、2年時には海外の保健プロジェクトにインターンシップとして学びに行き、その後修士論文の調査をするため、8カ月間の海外滞在をすることがカリキュラムになっています。

3. バングラディッシュ短期フィールド研修

今回短期フィールド研修にて初めてバン

グラディッシュへ行く機会に恵まれました。3週間の滞在では、バングラディッシュ国や地元 NGO の健康改善対策や、二国間、多国間援助による保健プロジェクトの視察を通じて洞察を深めることを目的にしています。

NGO の現場視察では、5 万人以上の常勤スタッフを抱え、最近ではアフリカ地域でもプログラムを展開している世界最大の NGO、BRAC を視察しました。BRAC は縫製品や牛乳販売などの収益事業を持ちつつ、その利益を福祉事業などで社会還元しています。実施されているマイクロファイナンスプログラム、ウルトラプア（最貧層）対策プログラム、都市スラム地域における母子保健プログラム、WASH（Water and Sanitation Hygiene）プログラムなどを視察しました。

今までの経験から、特に興味を持ったプログラムは村レベルでの住民を巻き込んだ BRAC のマイクロファイナンスです。私はガーナの地域保健総合改善プログラムにおいて、女性のマイクロファイナンスグループの組織化、トレーニング、モニタリングとフォローアップに深く関わりました。やる気のある村の女性をグループ化し、ビジネス成功例をフィールドトリップで見に行ったあと、家畜飼育や養蜂、農業の研修を 2 週間行いました。成功例をフィールドトリップで見た女性たちは当初やる気にあふれていましたが、利益が出るまでに数カ月時間がかかったことやグループ内の人間関係がうまくいかず、活動を軌道に乗せることは非常に難しかったです。この経験からグループの組織化の方法や参加者の高いモチベーションを保つアプローチ方法に興

味を持っていました。

マイクロファイナンスは同じ村落内で、経済的に中程度の貧困層（Moderate Poor）5 人組みのグループを作り、グループで資金を借りて小規模ビジネスを始めます。借りた資金は 5 人で責任をもって返すという仲間内の圧力（Peer Pressure）を働かせること、トレーニング提供、貯蓄に対する高い利息、毎週の少額返済制度が BRAC の取っている方法です。特に仲間内の圧力（Peer Pressure）が 99.3% の高い返済率に大きく影響を与えているようでした。BRAC はタンザニアやウガンダでもマイクロファイナンスを行っているが、社会や文化が違うアフリカでもやはり Peer Pressure が効くということでした。

バングラディッシュは後発開発途上国（LLDC）の優等生といわれるように、6% 台の着実な経済発展、貧困人口減少、初等教育における男女格差の解消と高い就学率（83%）の達成、治安の良さ、家族計画が農村地域に行き届いていることなど人々のエンパワーメントおよび国の発展の可能性は多くあると感じた研修でした。

4. 実務専門家の道を歩もうと考えているあなたへ

どの道でもそうだと思いますが、専門家への道は遠く、常に向上をしていくための高いモチベーションと努力を必要とします。大学院の同級生達は 30 代、40 代が大半ですが、さまざまな社会経験を持ち、その経験に専門知識を上乗せしようと高いモチベーションをもって来ています。さまざまな社会経験は、その時にはすぐに国際協力と結び付かなくとも、その人の能力の引

き出しを増やし、結果的に現場へ出た時にそれが強みとなってくることもあります。また、国際協力専門家への道はいろいろあり、どの経験がどこで評価されるかわからず、思いもよらぬところでちょっとした経験に対し、高い評価を得ることもあります。

まず学生のうちに準備できることとして考えられるのは、NGOや公益法人が行っている勉強会に参加して新たな知識を学ぶことや、ボランティアやインターンなどをして知り合いを増やしていくことです。また、ご存知の通り、語学力は必要不可欠です。英会話レベルではなく、業務を行うレベルのスコアを学生のうちに、あるいは社会人として仕事をしながら早い段階で取っておく必要があります。

国際協力の専門家になるために、修士号は必須となってきているというのはすでに広く認識されていますが、大学卒業後すぐに大学院へ進学した人が国際協力の現場で有利かという、必ずしもそうではないというのが現在私の持っている印象です。むしろ、それまで社会人として築いてきた経験や学問にどのようなものを上乗せして専門としていくのが重要となってきます。

以上、今までの自身の歩んできた道からの感想も含めて述べさせていただきました。4年間興味のあることや自分にとってプラスになると思うことに全力で取り組んでみてください。将来、敬愛大学の卒業生と共に国際協力の現場で仕事ができることを楽しみにしています。



Appendix ･･････ 付録

- Jump into a New World!規定
- 執筆者一覧

[付 録]

“Jump into a New World!” 規程

1. Jump into a New World!は、敬愛大学国際学部 of 学生たちの活動及び学習の成果の発表を目的として定期的に発行される。
2. 刊行については、本学国際学部教授会 of 選任した編集委員会がその任にあたる。
3. 執筆者は、原則として本学学生及び教職員とする。
4. 原稿掲載の採否は、編集委員会がこれにあたる。
5. 提出された原稿は、編集委員会の裁量によって原稿の内容の主旨を変えずに文章を大幅に訂正する場合がある。
6. 本誌に掲載の原稿の著作権は国際学会に帰属するものとする。
原稿のデジタル化(CD-ROM掲載、ホームページ掲載)は、国際学会に一任するものとする。
7. 本規程の改正は、編集委員会の議を経て国際学部教授会 of 承認を受けたものとする。

[付則]

本規程は2003年4月1日から施行する。

編集後記

2009年春、国際学部は稲毛へ移転しました。年末、Jumpの編集陣も一新しました。昨年度は新型インフルエンザ騒ぎや景気の悪さなどで、恒例の海外スクーリングなどは実施を見送り、学外の活動はあまり活発ではありませんでした。そんな中でも、敬愛の学生たちは、今年も生き活きとした動きを見せてくれました。彼らの活躍をご覧ください。

(編集者一同)

執筆者一覧 (あいうえお順)

学 生	張 晶
アディカリ・アルジュン	鄭 星
今枝優子	唐 麗
岩井さくら	パンデ・ビレンドラ
殷奇松	ポウデル・ナラヤン
王セイ	羅 英
魏剛	李心欣
ギミル・ハリバラサ	李バイ
金善海	李智超
邱運霞	李美英
高鈺洋	
胡義雲	卒業生
蔡萍	平野志穂
サンギタ・カトリ	前野文康
周供	
鈴木美保	教員
ダッラコテ・クマル	織井啓介
タパ・プスカル	村川庸子
タマン・チャクラ	山本健

Jump into a New World! 学生たちの国際体験記 第9集

2010年 4月 30日発行 (非売品)

編集人 国際学会運営委員会

発行人 中村圭三

発行所 敬愛大学国際学会

〒 263-8588 千葉市稲毛区穴川1-5-21

TEL 043-251-6363(代) FAX 043-251-6407

印刷所 株式会社 ニッポンパブリシティ

編集人の許可なく、本文を無断で転載・複写・複製することを禁じます。

JUMP INTO
A
NEW WORLD!
学生たちの
国際体験記

第

9

集